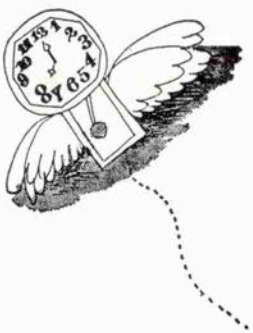
神戸百店会だより



★舶来雑貨の店〝クロス〟生田前支店オープン

トア・ロードにある婦人・紳士靴、高級舶来雑貨の店クロスが、昨年12月20日に生田前支店をオープンしました。舶来のネクタイやルームアクセサリーの小物を中心に家具も置いてあります。ダンディな若い店長さんが品選びにアドバイスしてくれるのも楽しい。一度のぞいてみる価値のある神戸らしいステキナお店です。営業時間は午前11時から午後9時まで。☎078（331）5983

クロスの生田前支店店内

★大和屋シャツの特別サービスセール

神戸国際会館一階南正面入口にあるシャツの専門店大和屋が、2月2日から17日まで（午前10時～午後6時、月曜定休）特別サービスセールを開きます。全商品2割引、その他特別サービス品としてスイス、ドイツ、英国、国産生地が出品されます。時節にそなえて、このセールをぜひお見逃しなく！

★ユーハイム・コンフェクト本社売店が新装

南蛮美術館東隣りのユーハイム・コンフェクト本社売店が昨年12月新装オープン！より明るくより広くなり、買いやすくなりました

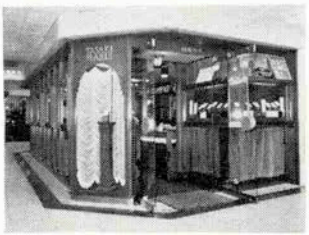
★松本奉山さんの水墨画を展示―凪月堂さんちか店

さんちかスイーツタウン内にある凪月堂の喫茶室に松本奉山さんの水墨画五点が展示されています。期間は1月から3月末まで。

これは、ルナ・ピナコティカ（月の美術館）と名付けて、三ケ月ごとに絵をかけかえている凪月堂20回目の企画。お茶を飲みながら絵を楽しめるなんてちょっと風雅です。

★田崎真珠の「フルフルセール」好評

さんプラザビル3階にある田崎真珠さんプラザ店で、12月21日から25日まで恒例のフルフルセールが開かれました。この期間中は真珠や宝石を一割引から二割引してくれるので、待っている人もいるほど。「一万円から二万円までの真珠や宝石がよく売れ、プレゼント用にとたくさん買うお客様もいてこのフルフルセールは好評でしたが、お店にちょっと入りにくそうなお客様もいらしたのでどうぞご遠慮なくのぞいて下さい」というお店の人の話でした。



田崎真珠さんプラザ店

次回は5月にスプリングセールを予定しているとか。

●ショップトピックス

★大丸前の**神戸シャツ**に舶来のとりはずしのできる礼服用フリルがついたシャツが豊富に入荷しました。洗濯もできるので便利です。オシャレでダンディな神戸っ子紳士方はぜひ一度のぞいてみられるといいですよ。お値段は9千5百円から2万円まで。

★春の結婚シーズンを目前にして大丸前の**つるや衣裳店**が新作婚礼衣裳展示会を開催しました。1月13日オリエンタルホテルで、27日貿易センタービルであり、新作婚礼衣裳の美しさに嫁ぐ日近いお嬢さんたちは熱心に品定めし次々と予約商品が決まっていきました。打掛・白無垢小物一式付3万5千円から30万円まで、お色直し振袖は3万円から16万円まで、留袖・袋帯小物一式付4千円から2万5千円まで、ウェディングドレスイブニングドレス2万円から7万円までといろいろで、式前日から三日間借りられます。お店の人の話では10万円から15万円までの打掛が一番よく出ており、年々豪華になっていくということです。なお3月10日（午前10時～午後5時）にも貿易センタービルで展示会が開かれます。

★また、三宮センター街東入口近くの**中川衣裳店**でも、1月6日オリエンタルホテルで、1月13日舞子ヴィラで、1月20日ニューポートホテルで新作婚礼衣裳展示会を催し非常に好評でした。なお、2月3日（午前10時～午後5時）にもオリエンタルホテルで展示会があります。結婚間近かの方は、お見逃しなくぜひどうぞ！

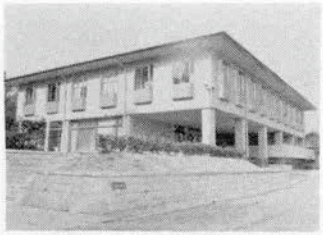
★元町、さんちか、センター街にある玩具の店**カメヤ**に、雛祭を来月にひかえて、段雛、立雛が豊富に揃っています。この三、四年大いに人気のある真多呂さんの作品木目込み雛はカメヤの推せん商品で、手入れが簡単で場所をとりません。お値段は3万円から8万円まで。また、50万円という超豪華な雛人形もあります。

ポケットジャーナル

★垂水区玉津町に吉田郷土館オープン

地元から出土した古文化財の保存とコミュニティセンターの役割を兼ねた「吉田郷土館」が昨年末、垂水区玉津町吉田に完成した。

吉田地区では四十年から住民が土地区画整理事業を行い、新しい町づくりを進めているが、四十一年に吉田・片山遺跡がみつかり、田辺昭三平安高校教諭を団長とする調査団が四十二、三年にかけて両遺跡を発掘調査した結果、弥生式土器、土師器、須恵器の破片数千片が発見された。しかし神戸市内にはこうした古文化財の収容施設がないため、神戸市と玉津町吉田財産区は埋蔵文化財の保存と地域住民の余暇活動の場を兼ねた吉田郷土館をこのほど建設した。一階の資料展示室には弥生式土器、石器など約二百点が展示されている。



オープンした吉田郷土館

★電話がチャンス！お見合いパーティ

神戸テレホンサービス（神戸市葺合区生田町2丁目4☎241―八八八一山下駿児取締役）の〝テレホンチャンス〟（でんわのお見合い）が、昨年九月にスタート以来、全国的にヤングの爆発的な人気を得て、その第一回クリスマスチャンスパーティ（本誌後援）がさる十二月二十二日午後六時より三宮神戸家具一階（神戸国際会館南側☎251―〇七二一）で、二〇〇名の独身男女が参加して、楽しくなごやかに開かれた。

司会は奥田博之・大牧睦子さん。マンガ家のたかはしもうさんがチャンスレディの理想の男性を描いたり、パーティの中から恋人になるチャンスができるといった趣好。

電々公社の協力で、場内には電話がそなえられて、気にいったチャンスレディやチャンスマンに電話で申し込んだり、ダンスタイムやゲームの中から当日ラブカップルもさっそく六組誕生。参加した若い人々は真剣で、両親一緒の人もあった。

男性が七割と非常に多く女の子はモテモテ。また、今年も二回開かれる予定なので乞うご期待！

誰が射止める！お見合いパーティ

★少年の町に体育館を！

25周年を迎える社会福祉法人「神戸少年の町」（垂水区塩屋町梅木谷☎七五一―二二二二）は、やむなく中断の状態にあった体育館移築を再開する計画を進めている。

誕生日ありがとう運動

★精神薄弱と遺伝

みなさんは精神薄弱児の生まれる原因といえば何が一番多いと思われていますか。

「原因は遺伝だ」という声があなたの脳裡をかすめるのではないでしょうか。

わが国では精神薄弱といえば、イコール遺伝という誤解がなんとなく一般化しているようです。

ところが、精神薄弱児の生まれる原因で遺伝によると思われるものは、わずか二割たらずで残りの八割は他の原因で生まれているのです。

そこで、「誕生日ありがとう運動のしおり三十七号」では、「精神薄弱と遺伝」というテーマで神戸大学附属病院長　黒丸正四郎先生の話を対談形式で解説しています。

みなさんの購読をおすすめします。

なお、本運動では精神薄弱問題の啓発紙としての「運動のしおり」をつぎの要領で頒布していますので本部へお申し込みください。年間購読料百円（季刊年四回発行、切手代用可）。氏名、住所を書いて申込んでください。

★運動のしおり既刊号の紹介

三六号　中・高校保健体育科教科書にみる精神薄弱問題

三三号～三五号　福祉と人間シリーズ①②③重症児施設の職員不足

三二号　普通児の中の障害児教育

三一号　福祉教育

誕生日ありがとう運動本部

神戸市葺合区御幸通八の九の一神戸国際会館一階（郵便局の前）（二五一）八一六一内線316

キリスト教的愛の精神に基き、少年たちを養護し健全な市民に育てることを目的とする少年の町は、42年大阪国際見本市のワシントン館の建物を譲り受け、大工さんはじめ多くの人の奉仕と励まし、少年たちの働きにより基礎からコンクリートの立ち上りまでできあがっていた。しかし完成には二千百万という多額の費用が必要で、少年の町に体育館を作るため市民の善意が求められている。

★火の車でつっ走れ！

社団法人市民同友会（小林芳夫理事長）がこのほど二十五周年を迎え、記念祝賀会が十二月十二日に六甲荘（生田区北野町）で行なわれた。君本昌久さんの司会で進行され、小林さんの挨拶などのあと、二十五年の経緯を劇で綴った「火の車でつっ走れ」が市民の学校〈車座〉全員によって上演された（脚本平田守純、演出阿木五郎）。五年毎に事務所の移転をよぎなくされ、四十七年には解散一歩手前まで行った次第をややコミックに表現、フィナーレには全員揃って「火の車の喝采」を合唱、経済上の困窮にも負けず頑張ろうと二十六年目に向けて決意を新たにした。このあと、すき焼きパーティなどで、参加者の交歓が行われた。

「火の車の喝采」合唱は高らかに

★街の八百屋さん大繁盛！

最近、三宮の駅前やセンター街のかどで、ミカンや白菜やサツマイモを盛ったカゴを路上に並べた八百屋さんが現われた。家で栽培した野菜を直売したり、家族商売で構えは小さいながら良心的なのか、ショッピング途中の女性が立ち寄る風景も見られる。これも物価高と不安な世相の反映か、見てくれより実質が求められるようになったのでは。

三宮のどまんなか、八百屋さん

昨年三月から店を出しているというおじさんに、場所がいいから儲かるでしょうと尋ねると「儲かるといっても……」と言葉をにごしたが、まんざらでもない様子。一月八日大きめのミカン十個で二百円だった。

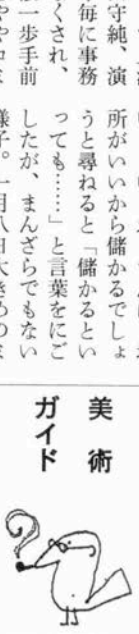
★諸岡博熊「文化開発のすすめ」出版記念会開く

本誌〝技術ジャーナル〟でおなじみの諸岡博熊さん（阪神外貿埠頭公団工務部長52才）が、十二月現代芸術研究所〈東京都青山六―一―二三〉から、市民のなかから文化をと「文化開発のすすめ」（二一四頁八五〇円）を出版。クリスマスの二十五日夜レストラン〝バーグ〟で、一五〇名の先輩、友人が集って、出版記念会が開かれた。

「行きづまる機械文明の中から脱出するため、生々しい人間のイブキを掘り起そう」という岡本太郎氏のテープスピーチや九十九黄人、梶木豊二・水谷頴介さんを始め、土木技術関係の人々など多彩な顔ぶれが揃

諸岡さんを囲んで出版記念パーティ

美術ガイド



★兵庫県立近代美術館
神戸ゆかりの日本画家　1／26〜2／24
村上華岳展
★白鶴美術館　三月中旬まで休館
★南蛮美術館
江戸時代の洋風版画　1／2〜2／24
★そごう百貨店六階美術画廊
東憲作陶展　2／1〜2／16
柳海剛高麗青磁作陶展　2／8〜2／13
坂倉新兵衛・小野具定二人展　2／15〜2／20
東郷青児小品展　2／22〜2／27
★大丸百貨店四階美術画廊
高級茶道具名品展　2／1〜2／5
石川晴彦仏画展　2／7〜2／12
現代俊英作家日本画展　2／14〜2／19
日本の伝統工芸・龍村織展　2／21〜2／26
★KCCギャラリー
神戸新聞・デイリースポーツ社員合同作品展　2／6〜2／12
神戸学院大学写真部展　2／20〜2／26
★さんちか広場
神戸市立小学校図工展　1／31〜2／5
神戸二紀展　2／7〜2／12
神戸デザイナー学院卒業展　2／14〜2／19
兵庫県発明展　2／21〜2／26
★ギャラリーさんちか
兵庫県青年洋上大学写真展　1／31〜2／5
神戸二紀展　2／7〜2／12
太陽と緑の道写真展　2／14〜2／19
兵庫県独立会友展　2／21〜2／26
★安田画廊
西井太得油絵個展　2／5〜2／10
掬気会洋画展　2／12〜2／17
鈴木照三ドイツスケッチ展　2／26〜3／2
★ギャラリー新光
ブランギン（オリジナルと複製）エッチング展　1／19〜2／3
南美会油絵展　2／9〜2／15
ラファエロ幼稚園児作品展　2／16〜2／22
グループはんつもり油絵展　2／23〜3／1

った。市民のエネルギーを生き生きとした発想で文化展開して行こうというこの本は、神戸市民のご一読をおすすめしたい。〈お申込み神戸っ子編集部へ〉

★古き良き新開地物語

神戸の町を知ろうと思えば新開地を知らなければ知ったことにはならない。

このほど「神戸新開地物語」が、神戸新聞社会部の浜淵節夫さんとのじぎく文庫の山本秀介さんにより、のじぎく文庫より発刊された。

人々が新開地に集まり、十銭で三本立てや四本立ての映画を見たり、笑いこけるため劇場に入ったり、十銭のライスカレーで満腹したということなど古き良き新開地がおもしろおかしく写真をふんだんに使って紹介されている。千二百円。

★白と黒のおしゃれな世界

女性を美しくみせる最高の色とされる、白と黒だけの商品を集めたブティックが三宮に登場。おしゃれな女性に注目されている。

昨年拡張新装した神戸阪急（☎321―三五二一）にコート、ドレス、セーターからアクセサリーや靴まですべてモノカラーで統一されたブティック・モノ。ルールにしばられない自由なファッションをモットーに、スタッフは充実した商品セレクトに非常な熱の入れよう。

あなたも一度のぞいて見るべきでは。

白と黒でおしゃれを！ブティック・モノ

★神戸っ子新年号四九ページ座談会「神戸を界隈のある街に」で「食住機能」とあるのは「職住機能」の誤りでした。訂正しておわびします。

★プレゼントのお知らせ

ファッションアイ（82頁）のセーターを愛読者の方三名様にプレゼントします。**オールスタイル**㈱のこの春の新製品で、カラフルな春の街にふさわしい装いです。住所・氏名・年令・職業・電話番号をお書きの上〒650神戸市生田区東町一一三の一大神ビル8F月刊神戸っ子編集室プレゼント係までお申し込み下さい。2月25日〆切。

花時計

★耐乏の年だというが

暖かい和やかな正月であった――

神戸の空も青く澄んで晴れわたり、夜は星が美しい輝やきを見せてくれた。やはり、公害の凄まじさを思い知った。

今年はひとつには石油不足が生活のなかに切実に、いや猛烈な格好で迫ってくるだろうといわれている。

ロンドンあたりでは、十時には絶対の緊急使用をのぞいて、送電をしないという。つまりロウソク生活なのである。

そして、週二日の休日は週休三日になり、休日のマイカー使用は全面禁止といった徹底的な節約を実施している。

まだ、日本ではそれ程の事態にはいたっていないので、しきりに耐乏の時代だといってはいても実感として、どんな事態になるのか、はっきりしない。

正月休暇も終るといっせいに街には騒音が蘇えり、空はなんとなし煙りっぽい。しかし、当然石油不足による耐乏の時期が着々としのび寄っているのは忘れることは出来ない、少なくとも心の準備だけは必要であろう。

耐乏の時節がくれば自然に公害も少くなるだろう。皮肉なことだ。

〈Y〉

☆新しい関西を創造する総合雑誌

オール関西

〈2月号予告〉

☆グラビア「女の四季」星由里子
〃　「万葉記」⑪大養　孝
〃　「関西の建築家」
　　西山卯三、浦辺鎮太郎　他
〃　「私の散歩道」山口華楊
　　塚本英世、嘉納正治
〃　「And His Ladies」
　　松井　正
☆この人この時　大月秀夫　他
☆連載対談㉝　鴨居　玲
　　中西　勝
☆商売の最前線「モロゾフ」
☆大阪芸術大学の可能性をさぐる
　　放送学科
☆「織田作之助伝」㉔
　　大谷晃一
☆「競馬酔狂連」最終回
　　新橋遊吉
☆「大阪ものがたり」⑥
　　石濱恒夫
☆「夕ぐれに苺を植ゑて」
　　⑤足立巻一
☆小噺エロチカ　大門　克
☆ドクターエッセイ
　　木崎国嘉
☆「現代と伝統」②
　　吉田光邦

月刊　オール関西　編集部
大阪市北区梅ケ枝町八〇
梅新東ビル七階
TEL06―364―2434～7(代)

●お酒の殿堂

アサヒビール特約代理店

酒類調味食品問屋

㊧ 神戸酒類販売株式会社

本店・生田区中山手通1丁目76
TEL(078)321—0201(代表)
支店・西宮・垂水・兵庫

★ちゃんこ鍋でモリモリ力を
★とにかく遠慮はせずに
ダイナミックに食べよう！

さんちか味ののれん街

悟味酒

営業時間　11:00AM～9:30PM
定 休 日　第三水曜日
☎　(078)391－5319

茶房　あじさい

元町ファーストビル2F
TEL 391—9712
SUN FLOOR　3F
TEL 331—1712

連載小説

まだ遅くない

〈5〉七人の待

葉月一郎　え・小西保文

あらすじ　昭和四十五年秋――。毎朝新聞神戸支局の**戸波峻**記者は、地元の大手企業兵庫製鉄の公害キャンペーンに加わるよう**石津**支局長に命じられた。新聞のむなしさを知り仕事に意欲を失っていた戸波は、これを断ってバーの女**ユカ**との情事に溺れてゆく。

たまたま、兵庫製鉄の下請会社につとめる**堂本敏夫**の無罪判決の記事を書くが、このために堂本の前歴がバレ、会社は堂本を解雇する。復職の嘆願に行った戸波は、かつて酔っ払いにからまれて救ってやった兵庫製鉄秘書課の**細川亜紀子**と再会する。ある朝、戸波はユカの洗濯ものに一面に付着する黒い斑点に気付く。それは兵庫製鉄の降下ばいじんだった――。

神戸支局は、入口から対角線のところに、支局長の机がある。

そのすぐ横のソファで、来客と談笑している石津支局長の後頭部が見えた。来客は、長髪で、ひげを長くのばしている。――その顔をひと目みただけで、地元の画家、吉良陽之介とわかった。

一瞬ためらったあと、戸波は、まっすぐ支局長席に歩を進めた。

「おう、戸波か」

ひどくふっきれた表情で見上げると、支局長はすぐ客へ視線を返した。

「それじゃ、そういうことで、よろしく頼みます。念を押すようですが、この仕事は当分どなたにも内密に……」

「わかってます」

この三紀会の重鎮は、射すくめるような眼で支局長をとらえたあと、すぐに表情をなごませた。

「私を選んで頂いたことを光栄に思っています。せいぜい、ご期待に添えるよう取組んでみます」

日ごろは、いかにも神戸らしい、ひどく社交的な画家である。こういう紋切型の、かしこまった科白を口にするのは、めったにないことだ。

（なにか、よほど重い仕事を依頼されたらしいな）
戸波は、吉良画伯を眼で見送ると、すぐ支局長の表情をうかがった。
さめたコーヒーをまずそうにすする。まぶしそうに見上げ、戸波に椅子をすすめる。タバコをくわえる。一呼吸おくと、思い出したように、支局長は肩で笑った。
「吉良センセ、えらい緊張しとったなあ」
「……？」
「兵庫製鉄の公害キャンペーン、やってくれ、いうて注文したんや」
「え？　あの画伯に……」
「画伯に、じゃない。東神戸の住民で、たまたま絵の才能を持った人として、や」
「……？」
「公害問題は、特定の政党とか、一部の新聞だけが騒いだって、どうにもならん。住民みんなが、それぞれの立場で受けとめて社会に訴えていく。それしかないんやないかな」
そこで支局長は、照れくさそうに苦笑した。
「演説してる場合やないな。……つまり、あのセンセイには、赤い煙を出してる工場やら、町の被害状態を何枚か絵にしてもらう。うちは、それを紙面に連日のせてゆく。それだけのことや」
戸波は、心の中でうめいていた。
吉良画伯は、すでに、いくつかの賞をとり、中央にもかなり名が通っている。その知名度と絵の力量を、いわば〝利用〟しようというのだ。そして画伯の築いてきた花鳥風月の静かな画調をぶちこわし、社会派画家へとテコ入れする考えなのだ。
この支局長が、ひどく傲慢な男にみえた。鼻もちならぬ自信家と写った。
が、戸波は、心の中の小さな壁を、自ら乗りこえた。そして、胸の中を一気に吐き出していた。
「支局長、僕、この仕事、やらせてください」
「うむ？　うむ。どうやら、その気に、なってくれたな」
「いろいろ勝手なことをいいましたけど、やります」
「君はな、この企画に欠かせない人間や。はじめから、そう決めていたよ、おれは」
なぜ戸波の心が変ったのか、支局長は聞きもしない。
「おい。やっぱり、めし食おう。『糸平』のウナギ、おごるで」
あとに続きながら、戸波は自分の心が、ひどく平担になっているのに気づいた。いままでのザラザラした気持が消えて、幼児のような柔順さに還っているのを意識した。
（これも、ユカのおかげだろう）
けさ、ユカの洗濯ものに付着していた、生きもののような黒点――。
工場へ押しかけて、抗議したいくらいよ――いまにも泣き出したいように、ユカは頬をゆがめていた。
「世の中って、黙ってたら、ちっともよくならないみたい」
無口で、アカ抜けしない娘が、無意識のうちに吐き出したことば。それが、どんなに戸波の胸を揺さぶったことか。
宮崎県の、南端に近い片田舎から、たいしたツテもなく神戸へ出てきた。郷里には、老いた母と、職場の事故で右手を切断した兄が彼女の仕送りを待っているという。
名もなく、力もなく、羽根をやすめる軒も満足ではない女ひとり――。
戸波は、恥じた。
新聞記者は、一刻も早く、任地の土地に慣れ、その町の人の心を心とすべし。
その古めかしい教訓を、忘れていたような気がする。いや、五年も神戸にいることで、もう街のすべてを理解し、〝なんでも知っている〟つもりでいたのではあるまいか。
ところが、現実は、ピシャリと戸波に平手打ちをくわ

せた。
兵庫製鉄の公害を、決して知らなかったわけではない。多分、あの程度だろうと、勝手に頭の中で決めてしまっていたのだ。
（これは、ひどい。この汚れを、訴えなくて、どうするのか）
ユカが、無意識のうちに鼻先へ突きつけてくれた被害の告発状。それを、肌で受けとめた。
「ほんまやなあ。黙ってたら、何ひとつ、よくならないなあ」
そうだ。声を上げよう。無力な住民と肩を組んで、叫んでみることだ。少なくとも、「なにもしないこと」より、はるかに意義はある——。
「なにを考えとるんや」
ふとい声で、われに還る。
テーブル越しに支局長の細い眼が笑っていた。

「お前さんの分まで、いただいたよ」
「なにを、ですか」
「ウナギの生き肝（きも）や。大いに精力つけて、断固かちとらにゃいかんからな」
支局長は、労組の委員長みたいな口調になった。
「もっとも、このところ、お前さんの方が若干ジジくさかったけどな」
「すみません」
すんなりと謝れた。
「ついでに、お願いがあります」
「なんや。ゼニ以外なら、聞いてやる」
「ひとり就職口、世話してほしいのです」
「だれのや。女か」
「いえ、男です」
気がかりなことは、いっさい片付けて、仕事にかかりたい。それには第一に、あの堂本敏夫の勤め口だ。
戸波は、手短かに、堂本の一件を報告した。無罪判決を書いたばっかりに、職を失った男の救済方法……。
「なに？相手は兵庫製鉄の下請けか」
そりゃ、絶対に放っておけんな——つぶやくようにいうと、支局長は蒲焼を一気に口の中へ押しこんだ。
「よし、おれにまかしとけ」
不思議な男である。
ひどく頼もしいかと思うと、急に、なにもかも危（あぶ）なっかしくみえる。純情一徹と、どうしようも

ないキザな一面とが同居しているところもある。とらえどころのない大人こども——。

ご本人は、あっという間に蒲焼を平らげると「もう一人前追加するか」と、店の親父の方を眺めている。

「大丈夫ですか」

「うむ？　就職か。心配するな」

「いえ、財布です」

「バカ野郎。よけいなお世話だ」

「それに……」

まだあるのか、というふうに、戸波を軽くにらむ。その三日月のような眼へ、戸波は胸の底をぶつけていた。

「今度のキャンペーンです。せっかく書いても、本社でつぶされるんじゃないでしょうね」

反射的に、支局長の表情が硬くなった。〝凍った〟と戸波の眼に映ったほどだ。

はじめてキャンペーンへの参加を持ちかけられたとき同じ質問をしたのを思い出す。あのときも、この上司は声を荒らくした……。

だが、こんどは違った。

表情は、瞬くうちになごんだ。

「そんなことは、君らが心配せんでいい」

声も、荒らくない。むしろ諭すような柔らかさが感じられる。

「支局長ちゅうのはな、そういうときのために、おるんや。まあ、まかしとけよ」

しかし、その頬が少しずつ硬くなってゆくのを戸波は見た。少なくとも、ウナギをむしゃむしゃ頬ばっているときとは別人のような、近寄り難い表情である。

（支局長、やはり賭けているな）

確信に似た想いが、地下水のように湧き上がってきた。

あくる日——。

二回目のキャンペーン打合せ会は、かなりの熱気がこもった。

住民のカルテ——被害状況の取材にとりかかっていた松岡記者は、もういくつかの話題を抱えて帰っていた。

「生後一年半のこどもですがね、完全な小児ぜんそくです。島根県の郷里へ連れて帰るとピタッと直るんですが、もどってきたら元通り。医者は、灘に住んでる限りアカンいうてますわ」

町医者を十数軒回った、と〝早耳の松ちゃん〟は、びっしりメモをつづったノートを見せた。

八木沢記者は驚くべき事実を、淡々と報告した。

「先月、市役所と兵庫製鉄が結んだ公害防止協定ですがね、完全に馴れ合いですわ。工場を監視して、立入り検査もできるという住民代表をつくったのはいいのですが、その代表に下請会社の社長クラスが二人も入ってるんですよ」

「そりゃ、ひどいな。何故そんな……」

「下請の幹部は、あの地元の自治会組織をにぎってますからね、自然にそういうことになるよう早くから手が打たれていたわけですな」

八木沢はメガネを光らせると、頭をかいた。

「いや、お恥ずかしい。協定ができたとき、住民の立入り権が認められたのは画期的な収穫だ、なんてほめて書いたのは、この僕ですからねえ」

泉田次長が、ニコリともせずにいった。

「だから、あのとき、おれは〝なんか、におうぞ。裏があるんじゃねえか〟って、注意しただろう」

支局長が、あとを引きとった。

「よし、そのおわびもふくめて、今度のキャンペーンでカラクリを洗いざらい書いていこう。それはそうと、八木沢君、社長の会見の方は、どうなった」

「ええ、申入れてから、毎日のように電話で催促してるんですが、いっこうにラチがあかんのです」

「電話？　電話みたいなもん、あかん。出かけていけ。いいな。秘書でも広報でも、総務でも何でもいい。足を

運んで、足で引きずり出すつもりで交渉してくれ。ダメなら、おれが行く」
「わかりました」
軽く唇をかんで、八木沢がうなづく。八木沢だけではない。七人の侍と呼ばれる記者たち一人ひとりの胸に、その気迫が響いた。
釜の水が次第に温度を上げ、沸点へ近づくように、部屋の熱気が密度を濃くしていった。

戸波に電話がかかったのは、その会議が終るころだった。
「お忘れになったかしら。私、細川です。細川亜紀子です」
「あ、兵庫製鉄の……」
午後の七時を回っている。いまごろ、何の用事がある、というのだろうか。
軽い、しのび笑いの声が受話器から届く。
「ね、出ていらっしゃいません？食事でも差上げたいのですけど……」
「ええ。でも……」
「この間の、お礼もふくめて、いちど、是非と思ってたんですよ」
「お礼なんて、そんな……」
「じゃ、お礼は抜き。私、ひとりで、退屈してるの。待ってますわ」
店の名前だけ告げると、電話は一方的に切れた。
どこか舌打ちしたい気持と、兵庫製鉄秘書課という肩書への魅惑とが、戸波のなかで争った。しかし、タバコを一本、吸い終るころには、職業意識が勝っていた。
亜紀子が〝指定〟した店は、花隈にある。一流料亭が、棟続きに新築した和風スタンドで、店の名も「花くま」といった。
そのカウンターの一番奥に、亜紀子がいた。予告した通り、ひとりでグラスを傾けていた。

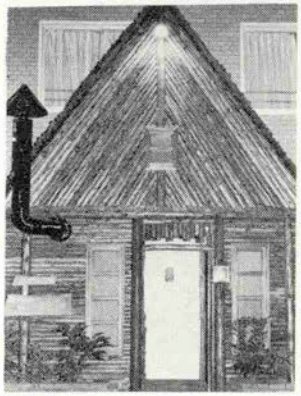
店へ入ってきた戸波を認めると、かげりのある微笑を一瞬、頬に走らせた。それが特徴の長い髪がゆらりと揺れた。
しかし、歓迎のことばは、ない。当然現れるものと決めこんでいたような、むしろどこか投げやりな姿勢さえうかがえた。
「どうも」
並んでカウンターにすわる。
「どうも」
同じことばを返すと、亜紀子はカウンターの中の、女将らしい女に声をかけた。
「おかわり。それから、こちらにも水割り」
戸波の中に、むくむくと好奇心が頭をもたげた。
「酒、強いんだね」
亜紀子は、チラと顔を上げ、かすかに肩をすくめた。
「軽蔑なさる？」
「別に。しかし、なぜ、僕を……」
「退屈したから。でも、あなた、忙しかったんでしょ」
「いや、もう済んだ」
「そんなこと、ないはずですわ。だって、あなたもウチの会社をキャンペーンする〝七人の侍〟の一人なんでしょ。こんなとこで、飲んでるヒマ、ないのと違いますか」
あっ――と心の底で叫ぶ。
もう知っている。兵庫製鉄の女性社員にさえ、ひそかに発足した〝七人の侍〟のことが耳に入っている……。
なんということだ。
〝敵〟の手ごわさを、立上がりにいきなり思い知らされた感じで、戸波はかすかにうろたえていた。（つづく）

作者近況

葉月一郎のペンネームでは、ちょっとわかりにくいが、重森守さん（朝日新聞元神戸支局長、現大阪本社編集委員）といえば「神戸の1人」や「はだかの記者」で神戸におなじみの社会派。一月十三日朝日新聞学芸部の川奈紀美記者と神戸で結婚されました。おめでとう！

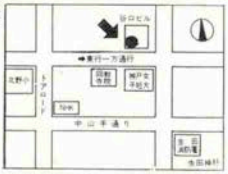
ゴックスタッドとはヴァイキングとよばれた、彼らの船のひとつです。さあ、あなたも**ゴックスタッド**で豪快に出帆しませんか。杯をくみかわし、世界の民族音楽にのって明日への旅立ちを語りあいましょう。

ゴックスタッド焼
マトン・ポーク・チキン・ビーフ・えび・いか・フィッシュ・ミックス　600円～800円
水割(OLD)400円、ビール 300円、特製料理各種あり。6:00P.M.～2:00A.M. 毎週水曜日は休み。



RESTAURANT & BAR
ゴックスタッド

GOKSTAD



神戸市生田区山本通3丁目回教寺院前　☎ 242・0131

元祖 焼肉

おいしさが
口いっぱいに
ひろがる……
本場の味

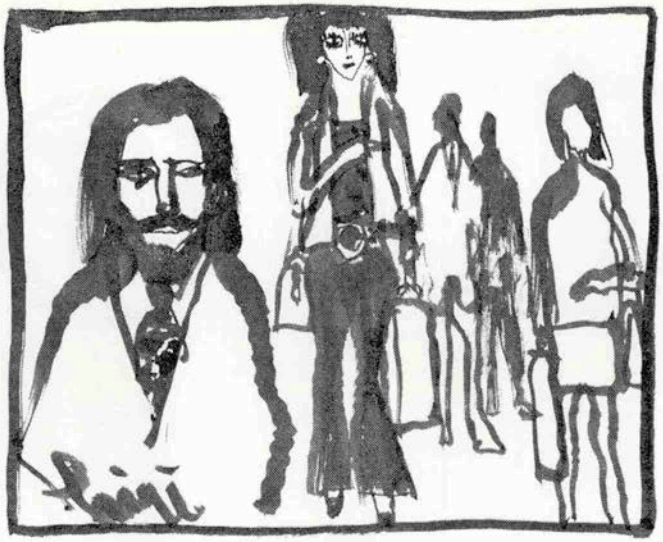
ばたなち

■三宮センター街柳筋店
TEL　321—3446・331—0572
■新開地店
TEL　576—1191
■平野店（平野市場内）
TEL　361—0821
■三宮センター街サンプラザビルB_1
TEL　391—3793

連載小説〈48〉

曲線ハイウエイ

武田繁太郎
え・横塚繁



〔あらすじ〕　東名高速サービスエリアで**多木洋介**は神戸の女性**宇津康子**と知合い、逢瀬を重ねるうちに康子にひかれていった。ある日友人**岡本和彦**と共に神戸へきた多木は康子に会えず、彼女の面影に似た**辰野英子**を紹介され、六甲山へドライブに出かけた。ロマンティックな情景に誘われて英子を抱きしめた多木の胸に、初めて感じるいとおしさがつのり、その夜二人は愛しあって別れた。

そんな時突如として康子から電話があり、多木と康子は二人の愛を確かめあった。翌朝、風のように去っていった康子を追い神戸にきた筈の多木は、岡本の早呑み込みと神戸の雰囲気の中で英子を捜している自分に気付いた。英子をみつけた多木は淡路島へのドライブに出かけたが、その帰りに中年の男と寄りそって歩いている康子を目撃した。その衝撃を負って帰京した多木のもとに康子からの屈託のない電話が入った。十日間の休暇をえた多木は、北海道へのドライブに康子と出かけ、札幌から海岸沿いの国道を通り、さいはての村島牧に向った。その村は、難病にかかった象の花子が温泉で闘病していることで、かつて新聞に報道されたことがあった。

島牧についた二人は、花子を見舞い花子の世話をしているS氏と親しくなった。S氏を招いて夕食を共にし、動物談議から愛と性へと話は発展した。二泊して二人は帰京した。帰京した多木に英子から電話があり、東京へ遊びにいくという。OKした多木は、新幹線東京駅まで出迎え、二人は若者の街、ジョウジの夜を楽しんだ。その夜、多木と英子は久しぶりにたがいの愛と性を燃やした。

英子は、多木と三日すごして、帰神した。多木は、富士、箱根、伊豆のドライブに英子を誘い、その夜は、箱根の芦ノ湖畔のホテルに泊った。英子には、伊豆ははじめての旅であった。

英子は、また、新幹線で神戸へ帰っていった。多木は東京駅まで見送りにいった。

「ほんとうに、たのしかったわ。いろいろお世話になって」

発車のベルにはまだすこし間のあるホームに立って、

英子は、多木の顔を仰いで、礼を言った。
「いや。ぼくも、たのしかったよ。やっぱり、君がきてくれてよかった。あのすき焼きの味、すてきだった」
多木も、英子の心づかいに、感謝したかった。
発車がちかづいた。
「じゃ、気をつけて」
「ええ、じゃね」
二人は、短い言葉をかわして、英子は、車内にはいった。彼女の席はホーム側にあったので、多木は、その窓のまえに立った。
もうたがいの声はきこえない。窓ガラス越しに、二人は、ただ微笑をかわしあうだけだった。
二人とも、こんどはいつ逢おうとも、約束しなかった。英子も、こんどは多木のほうから神戸にきてほしいとも言わなかった。いつもの別れのときとおなじであった。
いまも、そうだった。二人は、さようならも、言いあわなかった。二人とも、たがいの行動を掣肘することを好まなかった。
どちらかが逢いたくなれば、逢いたくなったほうからでかけていく。どちらも、こころよく迎えいれる。いままで、そうだった。
もしも、どちらかの愛が、なんらかの理由で、冷めるようなことがあったとしても、いっぽうの愛は、他方の愛の持続を強要してはならなかった。愛は、たがいに相手の愛からは自由であった。束縛されるなにものも、そこにはなかった。
愛とは、献身の別名だと、多木は思う。献身とは、無償の行為であった。愛は、無償の行為であった。愛は、自分が愛したくてたまらなくなって、相手を愛する。おのれを捧げる。おのれを捧げた相手から、なんらか報われるものを望んではならなかった。それは、無償の行為である愛の掟にそむいていた。
愛のひめている真実とは、たがいに相手の愛を虜にすることではなかった。相手の愛を、自分のものにしてはならなかった。
「彼はもうあたしのものよ。身も心も」
などと、誇らしげに語り、彼の愛をしっかりとわがものにしたと思いこんでいる娘がいる。あわれな錯覚であった。そういう娘にかぎって、彼の愛が冷めると、身も世もあらぬように歎き悲しむ。
「あたしがこんなに愛していたのに」
と、相手の不誠実をなじる。不誠実とは、愛が冷めることではない。愛は、熱しもすれば、冷めもする。熱することだけを望み、冷めることを拒む、自分本位な功利の心に、むしろ、愛の掟に従おうとはしない不誠実さがあった。
愛とは、ギブ・アンド・テイクではなかった。いわば一方通行であった。あくまでも無償の献身であった。愛の純度が高まれば高まるほど、無償の純度も高まっていく。愛の美しさとは、この無償の純度の美しさだといえたろう。
愛の姿とは、世俗の倫理や秩序に拘束されない、ほんとうに素裸になった愛の姿とは、このような愛であろうと、多木は、信じていた。そして、そのような愛をかわしあえる女性にめぐりあえたことが、多木には、無上にうれしかった。
列車は動きだした。窓越しに、英子は、手をふった。手をふりながら、しだいに速度をあげて、多木のまえからとおざかっていった。やがて、英子の姿は、多木の視界から消え去った。
多木は、列車がホームをはなれていっても、なおしばらく、ホームに立ちつづけていた。彼の胸中には、別れの愁いはなかった。愁いは、明日への未練を残すが、いまの彼には、その未練がなかった。
多木は、東京駅からまっすぐ荻窪の自分のコーポにかえっていった。部屋にはいると、ついさっきまでいた英子の残り香が、まだあたりにただよっているようであっ

た。
その香をいつくしむように、多木は、ソファに身を沈めた。ぐったりと身体が疲れているようで、それでいて気持ちが思いのほか昂揚していた。
「英子に逢えた。そして、いま別れた」
そう思うと、ぞくぞくするような、リズム感のある熱っぽいものが、身うちからこみあげてきた。いま、なにかが終ったのではない。これから、なにかがはじまるのだ。多木は、淡い酔いにも似た興奮をおぼえていた。
翌日、彼は、コーポの管理人に、このコーポをひき払う旨を伝えた。管理人は、けげんな顔をしたが、コーポをでる日に、権利金はかえす旨をこたえた。権利金の三十万円が、いまの多木には、もうさいごのカネだった。
彼は、さっそく、部屋の整理にかかった。独身者の部屋でも、いつのまにか、こまごまとした世帯道具類が、いっぱいたまっているものだった。人間というものは、生活のアカのように、こうした道具類にかこまれていなければ、暮してはいけぬ生物のようである。
だが、多木は、口笛を吹きながら、なにかたのしい作業でもするように、部屋の整理をつづけた。捨てられるものと、捨てられないもの、あるいは、カネ目になりそうなものなど、ふわけしていくと、身体にまつわりついた余計なものを、一枚一枚はぎとり、しだいに身も心もかるくなっていくような気がしてきた。
彼は、荻窪駅前にある古本屋と古道具屋のオヤジにきてもらい、それほど多くもない蔵書と、ベッドや食器棚などの家具類を処分した。古道具屋は、ステレオは買うが、テレビはひきとれぬと言う。
「じゃ、ステレオはただでいいから、テレビをなんとか処分してくれよ」
多木は足もとをみすかされているのを承知で、たのみこんだ。
「こんなにみんな整理して、どこかへいかれるんですか」
「うむ。日本脱出だよ。日本が沈没するまえに、外国へ逃げだすんだ」
多木は、とぼけたように言った。
整理には、丸三日かかった。がらんとした部屋には、ベッドだけが残されていた。翌朝、多木がこのベッドで寝ていると、電話のベルが鳴った。
宇津康子だった。北海道旅行以来、しばらくたっていた。もうそろそろ電話をかけてくるころだろうと、多木も予想していた。
「お元気？」
いつもの、ちょっと投げやりなような、それでいて、親しみをこめた声が、朝のひんやりとした空気をふるわした。
「ああ。君も元気？」

「ええ。あいかわらずよ」
「そりゃ、よかった」
「また、ちょっとあなたの顔がみたくなったの」
「うむ。どこで逢う？」
「そうね。あたしが、また東京へいく？　いってもいいわよ」
この女は決して多木を神戸へ呼ぼうとはしなかった。
「そうだな。君が東京へきてもいいけど、どうだい、浜名湖あたりでおちあおうか」
多木は、ふと、彼女とはじめてめぐりあった浜名湖のことを思いだした。これは、いい思いつきだった。
「ぼくは、ちょっと二・三日東京をはなれられないんだが、三日あと、どお？」
「いいわよ。あたしのほうは、いつでも」
二人は、三日後の午後三時に、東名高速の浜名湖サービスエリアで逢うことにして、電話を切った。
多木は、友人にもだれにも知らせずに、このコーポをひき払い、東京を去ろうと考えていた。宇津康子とも、電話はいつも彼女のほうからかけてくるので、こちらからは連絡のとりようがなかった。もしも、康子が、多木がコーポをでる日まで、電話をかけてこなかったら、彼は、彼女にも黙って、東京をあとにしようと思っていた。それならそれで、仕方のないことであった。だが、偶然、康子は電話をかけてきた。その偶然が、多木の行先きを決定する結果になった。彼は、東京をでても、まだどこへ行こうという当てを持ってはいなかったのだ。
「よし。ひとまず、浜名湖だ。それから先きは、風の吹くままだ」
その日、多木は、ひさしぶりにP大学にでかけて、事務室で、退学手続きをとった。このマンモス大学では、一人の学生の出所進退など、一枚の書類で事務的に処理してしまう。考えてみれば、多木自身もこの日までの身辺の整理を、きわめて事務的にすませていたのである。
その日、多木は、管理人から権利金をかえしてもらうと、コーポをひき払った。車庫から、愛車のMVをひきだした。いまの彼には、この愛車と、ポケットにねじこんだ三十枚の札だけが、財産だった。
だが、彼は、いつものドライブにでかけるときとおなじように、口笛を吹きながら、愛車のエンジンを吹かしにかかっていた。
（つづく）

〈神戸の催し物２月ご案内〉

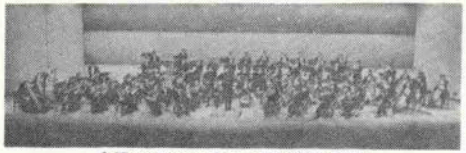
〈音楽〉

★レターメン
２月11日(日)PM2：00～4：00　神戸文化ホール　S¥2,600　A¥2,100　B¥1,800　C¥1,500　LS¥4,700

★全日本歌謡選手権
２月13日（水）PM6：00～7：30　神戸文化ホール　無料　主催／読売テレビ放送

★平岡養一リクエストコンサート
２月14日（木）PM7：00～9：00　神戸文化ホール　民音　一般¥1,250　会員¥750

★大阪フィルハーモニー交響楽団演奏会―辻久子を迎えて
２月15日（金）PM6：30～8：30　神戸文化ホール　A¥1,500　B¥1,300　C¥1,000　指揮／外山雄三　独奏／辻久子　曲目／チャイコフスキー作曲幻想序曲、バイオリン協奏曲、交響曲第５番


大阪フィルハーモニー交響楽団演奏会

★ニューサウンズオーケストラ――読売交響楽団
２月15日（金）PM7：00～9：00　神戸国際会館　¥2,000

★ナベサダ・ジャズ・コンサート
２月16日（土）PM6：30～8：30　神戸文化ホール　民音　一般¥1,500　会員¥1,000

★神戸のター坊チャリティ
２月17日（日）PM1：00～3：30　神戸文化ホール　A¥2,000　B¥1,500　C¥1,000

★チューリップコンサート
２月20日（水）PM6：30～9：00　神戸文化ホール　労音　会員¥1,200

★菅原洋一ショー
２月24日（日）①PM2：00～4：00　②PM6：00～8：00　神戸国際会館　民音　会員　¥1,100

〈演劇〉

★俳優座公演「リチャード三世」
２月６日（水）、７日（木）、８日（金）PM6：15～9：00　９日（土）①PM1：45～4：00②PM6：15～9：00　10日（日）PM1：45～4：00　神戸文化ホール　労演　会費¥1,200

★児童劇「ピノキオ」
２月９日（金）、10日（土）①AM10：30～12：15　②PM2：00～3：45　神戸国際会館　A¥800　B¥700　C¥600

★民族舞踊団わらび座「稲みのる」「富くじどろぼう」
２月20日（水）、21日（木）PM6：30～8：45　神戸文化ホール　一般¥1,000　中高生¥600　小学生¥400